

(34)

《書評》

門闈著 日本経済評論社

『中国都市商業銀行の成立と経営』

(神戸大学) 梶谷 懐

本書が分析の対象としている都市商業銀行は、都市信用社が1990年代後半の金融改革の中で改組されて商業銀行となったものである。前身である都市信用社は、もともと都市部に立地する集団所有制企業や自営業者を組合員とする協同組合方式をとり、それらの企業を対象にサービスを提供する金融機関として改革開放後に創設された。その設立にあたっては人民銀行や国有商業銀行の地方支店が設立機関になることが多く、またこれらの銀行の定年退職者が都市商業銀行の職員として就職するなど、人事面での結びつきも強かった。その後の都市信用社から都市商業銀行への改組も、人民銀行の地方支店や地方政府主導の下に進められ、改組後も地方政府による出資が一定のウェートを占めるなど、その経営においては一般に地方政府が大きく関与しており、他の形態の商業銀行に比べて地域密着的である、と考えられてきた。

このような都市商業銀行は、国有商業銀行や株式商業銀行に比べて「地味」な存在であったため、これまでにはその経営の実態についてはほとんど明らかにされてこなかった。しかし、著者も指摘しているように、国有商業銀行は資産規模からみれば圧倒的な規模を誇るもの、一行の規模があまりに大きすぎ、その経営状況の分析のみから中国の金融市场全般の動向——競争的になっているのか、それとも政府との関係がまだ色濃く残っているのか——を判断することはできない。その意味で、本書の分析対象である都市商業銀行は、金融市场に占めるシェアこそ大きくはないものの、市場競争と政府の介入との間で揺れ動く中国の金融機関の今後の方向性を考える上では、むしろ格好の題材を提供している、といえるであろう。

そんな興味深いテーマをとりあげた本書の特徴は、以下の三つの点にまとめられよう。第一に、都市商業銀行というこれまで光が当てられなかつた金融機関について、その経営状況やパフォーマンスについて詳細に調べ上げ、その地域間における差異に注目し、比較を行った点である。次に、2000年代に進んだ金融機関の情報公開を利用し、都市商業銀行の年報などを丹念に収集した上で独自のデータベースを構築している点である。そして第三に、そのようにして構築されたデータベースを用いた計量分析と、よりミクロな経営状況に関するアンケートやケーススタディという、二つの側面から都市商業銀行の経営の実態に迫ろうとした点である。

以上のような分析の結果、確かに地方政府の影響力は強いものの、具体的な経営への関与となると地域差も大きく、中には外資を積極的に導入し、経営者が強い権限を持つ、という株式商業銀行に似たパターンの経営を行っている銀行も生まれつつあることが明らかにされた。すなわち都市商業銀行といえども、必ずしもある地域において特権的な保護を受けているわけではなく、その地域に支店を設けている他の商業銀行との競争にさらされ、その中で経営状況の改善を図っている。そのことを明らかにしたのが本書の最大の貢献だと言えるであろう。

しかし同時に、本書には、その最大の目玉であるデータベースを用いた計量分析を中心に、その分析手法、あるいは結果の解釈の面で明らかに慎重さを欠いた記述が目立っており、そのことが学術書としての完成度を著しく低めていることを指摘しなければならない。

例えば、銀行の資産構造が収益性に及ぼす影響を地域別の回帰分析によって明らかにしようとした第3章では、「東部の地方都市において政府保有の（評者注：政府の出資比率が高い場合の）非

効率性が他の地域よりも顕著」である、と結論づけているが、なぜこのような推計結果が得られたかについては、十分な検討・説明を行っていない。金融市場が競争的な環境にあることが政府の出資比率が高い銀行の経営を圧迫するのであれば、東部の中心都市（省都）のほうがその効果は顕著なはずであるが、本書の記述は、そういった読者が当然抱くであろう疑問には一切答えていない。

また、第4章では、確率的フロンティア費用関数を用いて都市商業銀行の経営効率性を定量的に推計して、地域間の比較を行い、「中西部の銀行は東部の銀行より比較的費用効率的である」という結論を導き出している。しかし、著者自身がここで「比較的費用効率的」という曖昧な表現を用いているように、同章の計量分析の結果からは中西部の銀行の効率性が明確な形で示されているとは言い難い。むしろ図4-3、4-4を見る限り、東部のサンプルの中に一行非常に効率性の悪い銀行があり、それが全体の結果に影響を与えている可能性が高い。したがって、同章の結論部分における、「資産の規模と質がともに劣っている中西部の銀行にとっては経営状況の厳しさが経営圧力になっている」という説明にも疑問を投げかけざるを得ない。もともと計量的な実証分析は厳しい仮定の下で限定された仮説の妥当性を判断するものであり、実証結果から明確に導かれる結果以上のことを推測で述べ、さらにそれに推測を重ねるような記述を行うのは非常に危険である。

さらに、第5章の図5-9では、地域経済の成長率と都市商業銀行の貸出金のシェアの相関を検討し、二つのサブグループについて両者の相関がみられるとしているが、どのような基準によってそのようなサブグループが選ばれたのかについて全く説明を行っていない。このため、得られた観測結果に恣意的な解釈を行っただけではないか、という印象が否めない。

本書が実証的な手法で都市商業銀行の実態を明

らかにしようとした意義は認めるものの、それらの一連の研究を通じて、中国の金融市场についての明確なインプリケーションが得られたか、というと疑問を持たざるを得ない。というのも、各章でとりあげられた事実発見は、端的にいってそれぞれが断片的であり、本書を通読したとしても都市商業銀行の実態について明確な像を結びにくいくらいである。

例えば、6章では銀行経営者を対象にして行われた既存のアンケート調査の内容を整理し、「東部の経済発達地域に立地する都市商業銀行以外では集団的な意志決定が多く見られる」ことを指摘しているが、この事実発見は第4、5章で強調されていた地域別の経営効率性に関する分析結果とどのように関連しているのであろうか。統計データに表われてこない経営者の意向について分析を加えることは重要だが、肝心の「経営の意志決定」と「経営の効率性」に関して明確な関連は見いだされておらず、それまでの計量分析の結果を有効に補完しているとは言い難い。同様に、寧波市商業銀行と南充市商業銀行の二行をとりあげた第7章のケーススタディも、それがそれまでの章における計量分析の結果とどのように補完関係にあるのか、十分な説明はなされていない。

総じて言えば、本書はそのテーマの重要性に鑑みても、学術研究書として世に問う前にもう少し熟成を重ねることが必要だったのではないか、というのが評者の偽らざる感想である。かなり重要な箇所での誤植や表記のゆれが目立つことも、上述のような本書の完成度の低さを強く印象づけることになってしまっている。本書に収録されたいくつかの実証研究については、レフェリー付の学術誌に投稿して研磨を受けることにより輝きを増したと思われるだけに、評者としてはその点を残念に思う。

(2011年10月刊、299 + ivページ、本体6,600円 + 税)